

自然配植技術協会 ニュースレター

自然配植技術協会

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5

TEL&FAX : 075-254-6014 E-mail : shizenhaisyoku@pep.ne.jp

発行日 平成14年11月11日(第1号)

ごあいさつ

自然配植技術協会 会長 高田研一

日頃は、自然配植緑化の普及、啓発、研究に多くのご助力をいただき、本当にありがとうございます。

私どもがすすめて参りました事業は、地域の人材を育て、わが国の緑づくりの技術を文化として発展させるという大きな目的の下で、徐々にではありますが、全国の緑づくりの専門家の方々から支持をいただき、現実の緑化の中でも、さまざまな事例をみるに至るようになりました。

当初、樹林パッチ工法として、法面緑化から始まりました自然配植緑化も、多くの専門家の皆さま方のおかげを持ちまして、法面緑化、造園、治山、造林という緑づくりの全般にわたる幅広い分野で、その技術を展開できるように

なって参りました。

そのため、特に近年では技術的研究の必要性が高まっており、地域、分野の専門家のお任せする範囲の技術と、自然配植緑化という共通の土台の元で共有すべき技術、考え方の整理と更なる技術の蓄積が当面の課題ともなっております。

このたび、自然配植技術協会としてのニュースレターを発行するにつきましては、まだまだ行き届かぬ点が多々ございますが、今後、皆さま方のお手をお借りしながら、充実した内容としてゆきたいと考えておりますので、何卒、よろしく願い申し上げます。

* * * * *

会員からの報告

自然配植技術を生かした法面樹林化の初期生長について

平成14年10月、当社が施工した秋田市新屋地区の法面植栽工事における植栽後の様子を見てきました。

平成13年5月と平成14年3月に完成し、同一地域を2カ年に分けて施工したものです。新屋地区の当施工地は秋田市の西側に位置し、かつては自然砂丘地でありました。

秋田運河の造営により現在は住宅地、学校、ゴルフ場などがあります。現場は現在工事中の国道7号線秋田南バイパス延伸に伴う道路法面で、ゴルフ場東側の秋田運河に面した約5,700㎡、法勾配1:1.5~1.8、植生ネット概設の

むつみ造園土木(株) 榎 清英

切土法面と一部赤土粘性土による盛土法面(トンネル上部、クロマツ列植概設部) 最大法長約45mでした。

道路自体が工事中であった為、関係工事と調整を図りながらラフタークレーン45t級と仮設移動階段を有効に且つ広範囲で使用出来たことが作業性を高めたと思います。

植栽基盤保護材はバンブープランター、客土は現場発生砂質土にバーク堆肥・立山ユーキ・木炭粉の混合土、マルチング材には稲藁を使い、地元の素材再利用に少しは役立ったのではと思います。

樹木は第一期 17 種、第二期 17 種を使いました。規格は h=0.5 と 1.0 の小苗が主です。

今回の調査では、植栽後約一年半の時期と半年の時期と共に初期の段階ですが、それぞれ樹木の個性が現れていました。まず低木類の先駆種であるアキグミ・ヤマハギ・イタチハギの成育が旺盛で、それを追うようにタニウツギ・ヒメアオキでした。高木類ではクロマツ・ウワミズザクラ・ヤマグワ・ケヤキの成育が特に良好です。またパッチ状の端部では光条件が良いせいか成長が良いようです。ただ、植栽箇所の周囲は、植栽基盤から養分が伝達し、草本雑草が繁茂し、苗木が被陰されており、今後の成長にどう影響するか見守りたいと思います。



写真 秋田市新屋地区植栽工事現場の苗木生育状況

それよりも今回一番心配されるのは、周辺のニセアカシアによる植栽地への侵略です。施工時は地際よりカットしても、わずか一年足らずで周囲より復活してしまいました。もとよりこの地域は、アオサギのコロニーと隣接しておりニセアカシアの広い老木林に営業しています。地域感情もあり、この林は手付かずの状態であオサギ共々保護されて

います。

今後、生まれたばかりの樹林とアカシアの林、そして自由に空飛ぶアオサギとどの様にかかわっていくか見続けていくつもりです。

第一期樹種（17種）

クロマツ（105本）、キタコブシ（15本）、ケヤキ（27本）、ウワミズザクラ（15本）、ヤマザクラ（30本）、エゴノキ（18本）、ヤマグワ（42本）、カシワ（57本）、タニウツギ（117本）、ノリウツギ（84本）、アキグミ（75本）、イタチハギ（75本）、ヤマハギ（96本）、ムラサキシキブ（81本）、ガマズミ（78本）、ヒメアオキ（45本）、コマユミ（39本）

計 999 本（基本的には 3 本 / 1 箇所 × 333 箇所、場所によってはバンブープランターを用いない巣植えあり）

第二期樹種（17種）

クロマツ（114本）、キタコブシ（78本）、ケヤキ（111本）、ウワミズザクラ（75本）、ヤマザクラ（165本）、エゴノキ（60本）、ヤマグワ（114本）、カシワ（45本）、タニウツギ（60本）、ノリウツギ（60本）、アキグミ（105本）、イタチハギ（42本）、ヤマハギ（60本）、ムラサキシキブ（141本）、ガマズミ（138本）、ヒメアオキ（138本）、コマユミ（93本）

計 1,599 本（3 本 / 1 箇所 × 533 箇所）

第 ・ 期合計 2,598 本 / 5,700 m²

* * *

TOPICS グッドデザイン大賞「金賞」受賞

「四国横断自動車道」

事業主：日本道路公団四国支社徳島工事事務所

施工：大成建設・ベクテル共同企業体 意匠管理：大成建設(株)土木設計第一部

四国横断自動車道（鳴門～板野）までの 10.5 km の区間は、奈良時代の官道「南海道」とほぼ同じルートを辿り、四国霊場八十八カ所巡りの一番札所である霊山寺を始めとする神社仏閣の他、ドイツ館、ドイツ村公園などのある公園区域と隣接した道路づくりとなりました。周辺の里山の植生を分析し、豊かな森を再現するための自然配植緑化を実現、既存林との関係や植生基盤が良好な場所を選出し

ながら、苗木をエコプランターを用いて、ランダムかつ集中的に配植しています。

鳴門パーキングエリア工事は、2002 年度のグッドデザイン大賞の建築・環境デザイン部門の金賞を受賞しました。これは「自然と地域との共生」というコンセプトのもとで、人工構造物と自然との調和及び自然の再生に対する技術で評価を受けたものです。



写真 苗木のランダム集中配植状況

* * * * *

現場技術報告

王滝村牧尾ダム自然配植工事について

(株)信州グリーン 林 充憲

本年秋、王滝村にて自然配植の工事を行いました。実際、
本年秋の植栽分は全体工事の 1/10 程度ではありますが、

今回の施工内容等について報告致します。

工事概要

工事名：愛知用水二期 牧尾ダム堆砂除去第 2 期工事

工事場所：長野県王滝村田島地区ほか

工期：着手 平成 13 年 3 月 23 日～ 完成 平成 15 年 7 月 20 日

発注者：水資源開発公団中部支部

作業所名（元請）：飛島・佐伯特定建設業工事共同企業体 牧尾ダム作業所

法面植栽工担当：(株)信州グリーン

法面面積：19,320 m²（設計）

植栽数量：約 17,000 本 秋分はその内、2,200 本（エコプランター93組）

当工事は、昭和 36 年に完成した牧尾ダムに堆積した土砂を運搬、土砂にて形成された法面を将来的に森林とするということを目的とし、その植栽工法として自然配植工法が採用されています。

法面に使用されている土砂は、川の水で洗い流された状態の土、いわゆる砂・石が大部分を占め、今までの造園植栽の常識から考える“植栽土”とはかけ離れた土質です。なお、法面は、1：2の斜度、北斜面となっています。

今回の秋工事数量については、完成されてない法面が大

多数の為、法面保護等のため行われるチップ吹きつけの工事がまだ終了していないとの理由から、全体のほぼ 12%の植栽に留まりました。

植栽の手順

植栽を行うにあたって下記の手順で作業を進めました。

【準備工 植栽配置図の作成】

1. 法面をメッシュに分割・作図（約 100 m²/1メッシュ）
2. 予め選定されていた、単位ごとの樹種数量により、メ

ッシュごとと数量の算出

3. 樹種ごとの性質の理解
4. 配置図の作成（高田先生に指導をいただく）
5. 発注者へ配置図及び数量表の提出

【準備工 植栽準備マーキング】

1. 竹串（本来法面に芝を止めるもの）に予め樹種ごとに設定したテープ色で色分け
2. 配置図をもとに、法面に竹串を打ち込みマーキング
3. 樹木にも予め定めたテープで色分け
4. メッシュごとに、樹木養生場所に整理

【植栽工 植栽】

1. 樹木を現場法面に運搬
2. テープ色をあわせながら植栽
 - ・ ルーピングの処理・水づけ・エコプランターを必要な場所に設置客土
3. 植栽終了後数量、植え方等のチェック



写真 王滝村牧尾ダム付近の苗木配置状況

終了部分は全体工事の一部ではありますが、今回施工にあたっての過程と反省について書きたいと思います。

私が自然配植という名を初めて知ったのは、平成 14 年 2 月頃であったと思います。この牧尾ダムの工事を行うにあたって、会社から元請を通して資料を渡され初めて知りました。現在、松本で高田先生のセミナーが月一回行われていますが、もちろん他県でそれ以前に行われたセミナーに出席したこともございません。

当初、夏前にある程度、植栽に手をつけるとの工程となっていました。自然配植の資料を読み理解するのに手間取り、なかなか植栽の配置図を作成するには至らず、元請には大変ご迷惑をお掛けしたように思います。その間、高田先生にも直接ご指導いただき、結局秋分の配置図が完成したのは 9 月初旬でした。その後、実際の作業に取りかかることとなります。

作業の手順については、今回上記の方法で行いました。が実際、幾つか方法があると思われます。

配置図作成 法面に直接マーキング（色テープ分類） 樹木にマーキング（色テープ分類） テープ色をあわせ植栽 【今回】

配置図作成 作図を見ながら法面に樹木を直接配置 植栽

数量のみ決定 その区画の分だけの樹木を運搬 直接配置植栽

今回の作業方法は ですが、作図の時点、マーキングの時点で、それぞれ、本当にその植栽場所が正しいのか照らし合わせが可能です。又、公共工事において、監督官の立ち会い・検査等の時、マーキングテープ、図面にて数量と場所が明確になっているため確認に適しているのではないかと思います。

実際、今回この方法を選択したのは、とにかく自然配植工法で工事を行うのが初めてで、必ず作業上で間違いや手直しが発生すると思われたので、フィードバックをしながら作業を行えるということが最大の理由です。

事実、納得いかない箇所や、また高田先生の指導もあり、配置図は 2 回の手直し、法面マーキングは 1 回の手直しを実施しました。

しかし、この方法について問題点も多く発生しています。

配置図が技術面では最も重要になります。逆に、マーキング作業や植栽作業は、全く頭を使わなくても、図面を見てその場所に竹串を差し、竹串の色と樹木のマーキング色をあわせるだけで植え込みが可能です。

樹木の名称、性質など全く知り得なくても作業員は動きます。作業スピードについても、当初は、一人一日 100 本植栽でこれも多いですが、作業後半では最大、一人一日 140 本にもなりました。もし作業員にノルマを課した場合などはそれ以上の数値が出るのではないかと思います。

しかし、実際早ければ良いというわけでもないかと思います。

作業が早ければ早いほど、作業員の“植物への心使い”は、低下し、植栽作業の品質が落ちるということは充分考えられます。

また、もし配置に間違いがあった場合でも直すことが出来ない、作業員の自然配植に関する知識の向上がない。それ以前に、木の名前も覚えられないということが上げられます。

他、今回の工事ではマーキングを、私を含む 2 名で行いましたが、ちょっとしたマーキングの差し場所の違いによ

り、設計主旨が伝わらないとでも言いましょうか、全く異なった意味のマーキングになっている箇所が多々出てきてしまい、手直しを行いました。

植え込みについても作業終了後、見回りしてみると「あ～これは、分かってもらえていない、伝わっていないな～」という箇所が多くありました。

そのようなことがありましたので、工事後半には、作業前に作業員に対し植物に関するミニ学習会を実施しましたが、何かしっくりいかず、学ぶということは一朝一夕では難しいのではということを実感しました。

作業員の質が上がれば、区画ごと責任を持たせ、【数量のみ決定 その区画の分だけの樹木を運搬 直接配置植栽】の方法が、自然配植の出来としても最もいいのではないかと思います。しかし、これは作業能率が上がらない、作業員個人の能力の違いにより品質と能率が異なる、発注者の検査がしづらくなるなど様々な問題が出てくるでしょう。

また、おそらく植栽の配置が出来るレベルまでに、作業員の能力を向上させるための教育ということにかなりの労力が必要となります。



写真 作業員による植栽施工

その点、 と の中間である 【配置図作成 作図を見ながら法面に樹木を直接配置 植栽】の工法は、基本的な設計意図は図面にて伝わりますし、植栽するにあたっては、樹木名称程度は知らないと植栽出来ないのも、作業員の自己努力が活性化されることが考えられ、結局、能率と

品質のバランスが取れる施工方法となるかもしれません。

いずれにせよ、秋の何倍もの量がある来年春の施工を円滑に進めるためにも施工方法については検討と研究をすべきであると感じます。

確かに、丁寧で良い工事をしなければなりません。しかし、会社としての利益も当然、出さなくてはなりません。

他、非常に書きにくい事ではありますが、今後の為にお書きします。

今回この工事を下請けとして見積をするにあたって、会社では一般の公園工事にならった単価をそのまま採用して見積を提出していました。実際、自然配植を使用した場合の方が、原価が上がります。植物のことを想いながら植栽をする工法ですからそれは当然のことです。

それは、自然配植の工法を知らずに見積を依頼された場合の当然の結果ではありますが、実際利益率が少なくなります。

ゆえに作業員に勉強をさせながら作業をしてもらうという時間ももったいなくなります。植物に対して、吟味して植栽を行うことも時間ももったいなくなる気持ちになります。植物の配置をするという技術的な努力の他に、利益を出すという管理面でもかなり気を使っていることが事実です。

これは、元請として工事が出来ればほとんど問題はないと思いますが、下請になる場合必ず注意しなくてはならない今後の重要なチェック事項になると思います。

現在、松本では高田先生の月一回の講義が続いています。勉強が進むに従って、来年工事への新たなアイデアも出てくるかもしれません。しかし、幸か不幸か、学習が進むにつれて、以前書いた図面は、やはりもっとこうすれば良かった、などという後悔の念なども出てきたりしています。

来年、全工事が終了した時点でまた今回の工事について報告したいと思います。また、植えた部分については、今後の動向が非常に楽しみです。今後とも宜しくお願い致します。

現在計画中の自然配植緑化工事

1. 三重県 紀勢町土採場岩盤跡地の緑化・植栽計画
2. 長野県 神流川上部ダム
3. 奈良県 岩井川ダム法面緑化基本計画
4. 岐阜県 山県郡高富町佐賀～高木地内公共一般国道（256号）改築（改良）工事

自然配植技術協会 第2回年次総会議事録

(平成14年7月13日)

場所 京都市左京区 京大会館101号室

出席 58会員 委任状出席 25会員

1. 平成13年度事業報告

- 1) 自然配植緑化技術研究
- 2) 自然配植技能者養成講座開催(大阪、岐阜、東京)
- 3) 自然配植の提案、設計支援(長野県、徳島県、三重県、福岡県等)
- 4) メーリングリストによるネットワーク立ち上げ及び技術交流
- 5) その他(緑化相談等)

セミナー開催、メーリングリストの立ち上げ、緑化相談などの事業を行いました。協会事業としての緑化研究、技術交流会の開催、ニュースレターの発行が行えませんでした。事務局として、深く反省しています。

2. 平成13年度収支報告

収支報告は文末参照。

当初予算に比較し、大きな収入不足があり、これに応じて、支出も抑えましたが、実質的に約50万円の赤字が発生しました。これは、会員数の伸びが予想よりも少なかったことが原因です。

3. 会長人事、理事の新任

高田研一現会長の任期が本年6月末日をもって終了となるが、引き続き会長を担務していただくこととなった。

青木一雄氏(岐阜 昭和造園土木㈱)を新理事に委嘱。

4. 運営方針及び体制

- 1) 今後の事業運営方針
 - ・ 全国ネットワークへの対応
 - ・ 緑化関連各業種間、産官学間の情報交流
 - ・ 専門家間の技術交流の推進
- 2) 今後の事業体制
 - ・ 京都の事務局を当面維持する。
 - ・ 佐藤建設工業㈱のご厚意で、現在お世話になっている東京事務所を本年度は維持する。
 - ・ 理事会、技術委員会のメーリングリストを整備する。
- 3) 自然配植技能者資格認定に係る方針
 - ・ 資格の基礎となる理論、技術についての整理、検討、再編集、出版の作業を本年度、次年度の2ヶ年計画で行う。
 - ・ 施工管理に係るテキスト初版の編集に着手。

- ・ 資格認定の具体的検討は、諸般の状況を踏まえた上で、次年度に行うものとする。

5. 平成14年度事業計画

- 1) 既往自然配植技能者養成講座テキストの改訂、再編集。
- 2) 自然配植技能者養成講座施工管理テキストの作成。
- 3) 自然配植技能者養成講座の開催(松本、津、久留米など)
- 4) 自然配植緑化技術交流会(事例検討会)の開催。
- 5) 自然配植緑化の実施への技術的支援。
- 6) メーリングリストの充実。
- 7) ニュースレターの発行(年2回)

6. 平成14年度収支計画案

収支計画は文末参照。

達成可能な会員数を基にした収支計画を立案しました。なお、緊縮財政ですが、昨年実績よりもやや増額した内容となっています。セミナーテキストの出版に向けた内容整理、編集のための予算を取っていただきました。また、ホームページ、掲示板の創設を行うことになり、そのための予算は、ホームページへの広告掲載を団体会員のみなさまに協力していただき、その広告料を充てる方針といたしました。

7. 会員の拡大対策

平成14年度は、最低限の目標として、個人会員30名、団体会員20口の会員の拡大を行う。この内、個人会員の拡大は現行のメーリングリスト参加者150名を200名に増加させ、この中から、協会会員への参加を募るものとする。

団体会員については、現団体会員各社から推薦を受け、事務局と調整の上、入会をお願いするものとする。

8. ワークショップ

総会の後半には、ワークショップスタイルで、参加者の皆さんに緑化(造園、森づくり)、自然配植、協会運営などの点について話し合いを行っていただきました。たくさんのご意見、ご質問、ご提案が出されましたので、事務局で整理をしました。メーリングリストで公開をしましたが、ニュースレターでも取り上げていく予定です。(今回は「美について」の解説を掲載しています)。

平成13年度収支報告

自平成13年6月1日 至平成15年6月30日

収入の部	金額	予算
前年度繰越金	1,292,079	1,640,079
入会金 (個人22口、団体10口)	520,000	2,000,000
年会費 (個人30口、団体35口)	866,000	1,946,000
その他(資料代、利息)	30,740	
合計	2,708,819	5,586,079

個人50
団体50

個人61
団体79

支出の部	金額	予算
事務局人件費	800,000	900,000
研究調査費	113,065	500,000
印刷費(養成講座テキストの作成等)	85,820	300,000
通信費(通信費、振込手数料)	241,791	400,000
東京事務所開設費	100,000	100,000
東京セミナー援助金	100,000	
会議費	39,900	150,000
雑費(文房具、消耗品)	401,252	300,000
予備費	826,991	2,936,079
合計	2,708,819	5,586,079

平成14年度収支計画

自平成14年7月1日 至平成15年6月30日

収入の部	金額
前年度繰越金	826,991
入会金 個人30口 団体20口	900,000
会費 個人63口 団体55口	1,478,000
合計	3,204,991

支出の部	金額
事務局人件費	900,000
研究調査費	200,000
印刷費(養成講座テキストの作成等)	100,000
通信費(通信費、振込手数料)	250,000
技術資料とりまとめ費	300,000
会議費	150,000
雑費(交通費、消耗品費)	300,000
予備費	1,004,991
合計	3,204,991



写真 ワークショップ風景

自然配植技術の疑問点について

自然配植技術に関する設計や工事を行ったとき、また研究をしたとき、セミナーを受講したとき等に色々な疑問を持たれた場合、どんなことでも結構ですので、事務局までお寄せ下さい。

* * * * *

イベント情報

11月14日(木)平成14年度グリーンキャスター技術講習会

場所:富山県富山市 富山県民会館

内容:講演 葭田隆治氏

講演 高田研一氏

研究発表 高岡農地林務事務所 林道班 前田係長

(株)サンゴ 簡易法枠工の説明

11月29日(金)特定非営利活動法人 森林再生支援センター主催シンポジウム

(第3回農林水産環境シンポジウムにおいて)

場所:千葉県 日本コンベンションセンター国際会議場 303号室

内容:講演「日本の森づくりの文化と技術」高田研一氏

講演「小笠原の自然保護から考える」清水善和氏

講演「里山利用と薪炭の復権」野間直彦氏

パネルディスカッション

12月8日(日)京都古事の森「晩秋の自然散策と森を語る会」

場所:京都市左京区貴船地区

内容:午前 古事の森周辺自然散策

午後 講演「白神の森から京都の森へ」(仮題)松井淳氏

講演「森を育てる人へ」(仮題)高田研一氏

自然配植に関するQ&A (第1回)

7月13日の総会で、出席者の皆さんが、ワークショップスタイルで自然配植について、いろいろ意見交換を行いました。そこで出たテーマの中で今回は、「自然配植における美」の問題について取り上げました。

[1] 自然配植における美(その1)

自然配植で考える美とはどのようなものですか？

「美」の問題は、人さまざま、色々な議論があって、実際、美のありようもこれしかないというものではないと考えます。

今、緑のつくりだす「美」についても、同じく簡単には整理することは難しいでしょう。しかしながら、戦後の高度成長期以降に作られてきた公共緑地の樹種選択、植栽構造を見る限り、「美」のありようにさまざまな形を認めるとは言い難い、ある限定された選択がなされてきたのではないかと思われまます。

わが国には、古来、造園千年の伝統といわれる自然素材を用いた美しい空間形成の理論と技術があったことはよく知られている通りです。特に茶庭や禅寺の庭は深い精神性を体現しているといわれます。その骨格となる植栽は、「不等辺三角形」での配置、「縮景」、弧と直線の巧妙な組み合わせ、さらにただ1本の樹木だけによって構成されるデフォルメされた空間配置などに特徴づけられ、その多様な「形」をめぐる解釈にはさまざまな意見があるかと思えます。

自然配植における樹木の配置は原則として、粗密を付け、そこに「流れ」を構成することであると論じています。

いま、狭い造園空間での植栽を離れ、広い敷地、法面での自然配植緑化における美しさの表現というものを考えた場合、次のように考えることもできます。

手前から空間の奥へ進むにしたがって、小さな背の低い植物から、大きな植物(高木)が順に配されていく空間構成は、実際よりも空間を広く見せ、人に開放感を与える「遠近法」であるが、こればかりを原則として空間構成をするとう単調になりがちである。

「盆景」でよく用いられる手法である、手前に大きな植物(高木)を配し、空間の奥により小さな植物をもって

くる「逆遠近法」の構成もあり得る。

伝統的な造園の空間構成として、大きな木々の隙間から除き見えるものに視線を向ける対象物を配する「透かし」；例えば、ウメモドキなどの実のなる低木を向こうに置くこともよい。

樹木を断続的に粗密をつけながら弧状(線があまりにも揃い過ぎると不自然となる)に配置し、その中心点を手前の視点場(見る位置)に置くことによって、見る側に向かう緊張を演出する。

「流れ」を重視する。単に粗密をつけるだけでは、「緊張」と「弛緩」の間の脈絡がなければ見る側の感情がとぎれる。これをつなぐ「流れ」をあたかも山脈の尾根のように構成する。

「流れ」を脈打つ「昂まり」として、「大きい」あるいは「密」な植栽を構成させる。この「昂まり」は、隣り合う「昂まり」との間に距離、大きさのバランス(黄金比や大和比が参考になる)を考え、大小、粗密を持たせることが望ましい。

視距離、視点場、視速度、視角などを考慮し、「かすみ立つ背景となる遠目の山桜」なのか「一輪のサクラ」を大事にするのかの計算の上で、美しさは構成される。

内包的な空間構成における「美」と視点を空間の外側においた「美」は峻別されるべきであって、従来の公共緑地の美の多くは後者にしがっている。特に視距離が近く(近景)視速度が遅い空間でのインパクトは前者の方が大きい。

以上の点は、ただ思いつくままに、書き並べたもので、もちろん、異論もあるかもしれませんが、今後、自然配植における「美」の問題は、他の専門家の手もお借りしながら、研究を進めていきたいと考えています。

(高田)

* * *

会員拡大について(事務局からのお願い)

当協会は会員の皆様からの年会費(入会金)で運営されています。7月の総会でご報告しましたが、財務体質的にはまだまだ十分とはいえません。総会で皆様方にお示した通り、本年度中の目標として、団体会員20口(内11口は加入)、個人会員30口(内25口は加入)加入の目標

設定をしました。協会員の拡大により自然配植技術の普及が盛大になることを考えると会員の皆様方からの新規会員紹介が必要です。是非ご協力をお願いいたします。入会候補者を事務局宛ご連絡いただければ、入会に関する必要資料は当方からご案内ご送付いたします。